

「行人」論

——「漱石的」なものとは何か——

佐野金之助

「あの女はことによると死ぬかも知れない。万一癒るとしても、矢つ張り会ふ機会はなからう。妙なものだね。人間の離合といふと大袈裟だが。それに僕から見れば實際離合の感があるんだからな。あの女は今夜僕の東京へ帰る事を知つて、笑ひながら御機嫌ようと云つた。僕は其淋しい笑ひを、今夜何だか汽車の中で夢に見さうだ。」

二郎の友人三沢が、大阪から帰京するとき、同じ病院に臥していた「あの女」・芸者について語つた言葉である。文中、人間「離合の感」ということばに、作者漱石の心情の根底にあるものが詩的に象徴されていて、『行人』一篇を展開させる底流をなしていると思われる。これは興味深い一句である。一体、「離合の感」とは何か。その前に、そこに至るまでの事情を少々のおこよう。

二郎は、大阪で落ち合う約束で先に来阪していたが肝心の三沢はなかなかやつて来ず、さんざん待たされた挙句、彼が胃をこわして入院している通知を受け取つた。彼は大阪に着いた日、友人たちと深酒をして胃をこわし、座に居た芸者の話した病院に入院したのである。ところが三沢が無理に酒を吞ませたその芸者、つまり彼のいう「あの女」

が数日後同じ病院に入院して来たのである。やがて、毎日のように三沢を見舞つていた二郎と彼との間に、この女をめぐる嫉妬めいたやりとりが起つた。二郎はどうしても三沢と「あの女」を懇意にしたくはなかつたし、三沢もまた、二郎がその女の付添看護婦に近づいて行くのを見て平気でいるわけにはゆかなかつた。「其処に自分達の心附かない暗闘があつた」と二郎はのべているが、実は三沢には二郎のあずかり知らぬ深い意味がそこにあつたのである。動けなかつた三沢は、ようやく退院をする時になつてはじめてその女を見舞つてやつた。

「『あの女は君を覚えてゐたかい』」

「覚えてゐるさ。此間会つて、僕から無理に酒を吞まされた計りだもの」

「恨んでゐたらう」

今迄横を向いてそつばへ口を利いてゐた三沢は、此時急に顔を向け直してきつと正面から自分を見た。其変化に気の附いた自分はすぐ真面目な顔をした。けれども彼があの女の室に入った時、二人の間に何んな談話が交換されたかについて、彼は遂に何事をも語らなかつた。」そしてこの時、ひとり感慨深げにもらした三沢の感想が、冒頭に掲げておいた言葉であつた。

「離合の感」とは何か。

会った者が離れねばならぬ、という単純簡明な事実が、事実を超えて、人間的な深い感動に人を誘う理由は何か。「離」が一瞬にして「合」を照し出す。「離」という現在が「合」という虚在を鮮やかに幻視させる思い——それが「離合の感」というものではないか。その思いに、人は、人との出会い、人との合体を深く味わうのではないか。論理が詩に飛翔する瞬間がそこに現成する。そこで、「離合の感」を「憐れ」という詩語に置きかえてもよい。たとえば早く作者が『草枕』の那美の顔に求めた詩情に通ずる人間的な感情である。『行人』第一章の「友達」で作者が表現したものはその深化され普遍化された実存的心情に他ならない。

三沢は二郎と別れるに当って、もう一つ重要な話を残していった。——数年前、父が知人の娘の結婚を世話したことがあった。不幸にして離縁になったが、その娘を一時自分の家にあずかることになったのであるが、精神に異状をきたしている「其娘さん」が、三沢が外出するときに玄關まで送って来て、「早く帰って来て頂戴ね」といった。

「其娘さんは蒼い色の美人だつた。さうして黒い眉毛と黒い大きな眸を有つてゐた。其黒い眸は始終遠くの方の夢を眺めているやうに恍惚と潤つて、其処に何だか便（たぐ）のなさうな憐れを漂はせてゐた。僕が怒らうと思つて振り向くと、其娘さんは玄關に膝を突いたなり恰も自分の孤独を訴へるやうに、其黒い眸を僕に向けた。僕は其度に娘さんから、斯うして生きてゐてもたつた一人で淋しくつて堪らないから、何うぞ助けて下さいと袖に縋られるやうに感じた。——其眼がだよ。其黒い大きな眸が僕にさう訴へるのだよ。」

これが三沢の語る人間の「憐れ」である。女は、放蕩家だった夫に言えなかつたことを狂った今、僕に言っているのだと人は説明する。「けれども僕はさう信じたくない」のだ。「病気でも何でも構はないから、其娘さんに思はれたいのだ」という三沢は、人間の存在の姿としてそこに「憐れ」を直感し、そこに人間の「合」を感じとっているのだ。

「あゝ肝心の事を忘れた」と其時三沢が叫んだ。自分は思はず「何だ」と聞き返した。「あの女の顔がね。実は其娘さんに好く似て居るんだよ。」

外形ではあるまい。その顔を通してあらわれる「憐れ」の普遍性である。漱石は、人間存在の深い「憐れ」の相において離合の感を表現した。離によって照し出される合の詩的虚相において現成する「憐れ」こそ、真実な人間の存在感覚だと主張しているようにさえ見えるのである。

それは人と人との結合のみではない。己と己においてもまた然りである。

「年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけりさよの中山」
余談になるが、例えばここで西行が見ているものは、離合の感のさなかの「命」であり、「命」の存在感覚としてのあわれである。現実の用の世界をくぐりぬけて西行が向いあっている内部の世界におり立つてみるならば、そう言って間違いはなからう。

かくて三沢が「あの女」（芸者）に感じた離合の想いが「其女」（狂女）との離へ彼を誘い、其娘の死（離）がさらに、其女との合へ転成して行く。そこに油然として湧いた「憐れ」の詩的・人間的空間が三

沢をつつみ込んだ。三沢は二郎と別れて、今そこへ帰って行こうとしているのである。

ろう。

二

作者はこの「友達」の章で、ほかに二組の平凡だが幸福な夫婦、あるいは夫婦になろうとする男女を書いた。母方の遠縁で、二郎の家に書生同様に住み込んでいた岡田と、父の勤めていた官省の属官の娘で、時々頼まれものの仕立物を持って出入していたお兼さん夫婦、いま一つはその岡田の世話で、人の好い下女のお貞さんの結婚話もちあがっている。それを進めるために二郎は母の依頼で大阪に来ていたのである。

これらの幸福な男女の物語は、次章からはじまる兄の一郎、お直夫婦の暗い闘いを描く作品の中心部と対照されている。一応そういうことができるけれども、この両者の対照・関連は小説作法上の技巧に属することで、実は、第一章と第二章以下のつながりは、もっと深い意味をもっているのである。そこを誤読すると小宮豊隆『漱石の芸術』のように、「初めから『短篇をいくつか書いて見たいと思』はなければ『友達』のような、『行人』の主題とは直接関係のないものを、漱石が書く筈がないのである」というような誤りをおかすことになる。

再度言えば、第一章「友達」で描かれたものは、作者の人生に対する、人と人との結合に対する夢であり、人をして「離合の感」に沈思させる「憐れ」の相姿であった。この愛といふべきものの存在論的実相に対する漱石の直観が、第二章以下の一郎の現実を照し出すのである。そこに「行人」各章の内密な脈絡があるのだ。贅言を費せば、「憐れ」に象徴される存在の明るみの中で一郎の暗さが照明されてゆく——そういう存在論的構造が「行人」の世界である、と言ってよか

離合の感が、離において合を生きる歓喜であるとするなら、一郎の苦悩は、「合」つていながら「離」れている者の空しさである。

『行人』には、漱石の家庭生活や社会生活上の憂鬱がにじみ出ており、その幾層もの内面劇が一つの夢に向かって、言いかえれば深部の欠落にむかって統合されている。その夢、その欠落とはすでに述べきった「合」であり愛である。主人公一郎を動かす根底の力はそれである。しかしそういう力に動かされ促されながら、彼のとる行為の軌道はあくまで知的な形をとることに、彼自身も動かすことのできない個性がある。この作品に見るべきは、漱石自身がその内部から開示する知性の宿命と意義、ないしはその限界点であり、さらにその極限で一郎がもたらす「所有」の問題、世界との合体の問題である。『行人』の焦点はこの二つに集約できるのであり、しかもそれが、二にして一であるところに「漱石的」なものが、近代日本の象徴としてあらわれてくるであろう。

長野家の中で一郎はただ一人孤立して、妻子からも両親からも弟妹からも離れている。彼には、弟の二郎が母親の懐に抱かれようとするような甘えは少しもないのである。一郎が他者に甘えかかるところを潔癖に拒むのは、そこに「愛」とか「合」を感じるできないからである。

彼は妻のお直が弟の二郎に温かい笑顔を示すのを見て、妻の心が自

分から離れていることを感じとって苦しんでいるが、それは二郎に対する嫉妬を意味するのではない。むしろ妬情は全く無いといって差し支えない。彼の心は明らかに妻の離反に苦しんでいるのだが、彼の心の動きと行為は、妻の心を己の方に向けさせようとする以前に、妻の本心をはっきりと知りたいといらだつのである。いってみれば、「妻」の「離」という己の直感を判然と証明したいという方向にはたらくのである。それは「知」というものの本質的なあり方であり、同時にそれがその限度というものである。

一郎の「知」は、たとえば三沢の女が、「早く帰つて来て頂戴ね」と言った話をきいて、それを三沢に対する愛の言葉だと解釈する。精神病によって世間並の責任から解放された女の誠のこもった純粋な言葉だと理解しようとはたらくのだ。

一見、それは、三沢自身の願望と一致しているように思われる。しかし、三沢はその娘の姿に直接「憐れ」を感じて「病気でも何でも構はないから、其娘さんに思はれたい」と欲するのだ。それは一時的な情念ではなく、三沢の深い人間的な心情なのだ。ところが一郎は、狂女のことばを解釈している。両者は、似て非なる幸福感上の越え難い距離を示している。一郎の解釈は、実は、妻の本体を知りたいという知的願望から引き出されたもので、彼の関心はあくまでも妻の「離」の明証に向けられているのである。「噫々女も気狂にして見なくつちや、本体は到底解らないのかな」というのが彼の関心であり、それは、狂女の言葉の解釈から導かれた結論のようにみえながら、ことは全く逆である。一郎には最初に、妻の本心を知りたいという知的関心がある。その関心から発して、「女も気狂にして見なくつちや云々」とい

う仮定（一郎自身にしてみれば、仮定というよりも、それが願望になっている。）が生れる。その仮定から導かれたのが、さきほどの狂女の言葉に対する解釈なのだ。一郎と三沢の、つまり頭と心の、決定的な違いがそこにある。「行人」第一章「友達」の詩的直観と、第二章「兄」以下の小説的知性の対立がそこにあると言ってもよい。知的な作家の小説的追求の複雑な外観の奥に、人間存在の核としての単純明快な「愛」の直観が相即している事情を感じないとしたら、漱石の深い哲学を見過ごすことになるであろう。

一郎の知的な追求は、ついに常識をはるかにこえて狂気じみた依頼を弟にもち出すところまで行く。二郎に妻と一緒に泊らせて節操を試させようとするのだ。妻のお直は一郎と結婚する以前から二郎をしており、結婚後も二郎には和やかなうちとけた態度を示している。むしろ、二郎は泊ることだけはことわったのだが、たまたま暴風のために二人は和歌山の宿に一夜をともにすることになった。この時一郎は二郎に対して嫉妬や敵意を全くもっていない。奇妙でも何でもないので、知性というものは、知ろうという己の目標にのみそそがれて、嫉妬という情念には見向きもしないのだ。妻の心が二郎に向けられているかどうかではなく、妻が自分から離れていることを明視したいと望んでいる。そう極言しなければ一郎の奇妙な行為は理解しにくい。たしかに一郎の心情は常態からずれた索莫とした傾斜を感じさせるにもかかわらず、不気味な整合性を否定することはできない。

「……然し二郎、おれが霊も魂も所謂スピリットも攫つかまない女と結婚している事文は慥かだ。」

つまるどころ一郎のくだす結論がこれだ。一郎は二郎と話し合いながら、論理をそこまで引っぱってくるのだが、ここでもまた、結論がはじめにあったと言ふべきなのだ。「慥かだ」というはじめにあった直観に向かつて軌道をひくのが、知の必然であり限界なのだ。その筋道の乱れの無いところが狂気じみているのであり、妻の節操を、当の相手である二郎に試させようとするところに理路整然とした無気味さがあるのである。

「嬢さんねえの人格に就いて、御疑ひになる所は丸であります」

和歌山の宿から帰ったこの二郎のことは、一郎は顔色を変えたが何も言わなかったのも当然であろう。二郎は詳しい報告を帰京後にもちこすことになるが、一郎にとっては、報告をのびしのびしする二郎の不誠実な態度こそいらだたしいけれども、当の報告はすでに無意味となつてはいるはずである。

作者はここでもう一つ、一郎の心理を鮮やかに象徴する挿話を用意していた。それは、謡の仲間が訪れた折、社交家の父が皆の前でもち出した「女景清」の逸話である。

話は、父がまだ腰弁時代の二十五六年前にさかのぼる友人の艶聞であつた。その友人とその家の召使だつた女の話である。二人が夫婦約束をして一週間経つか経たぬうちに、お坊っちゃんの方が後悔して「御免よ」とあやまつたそうである。女はどうとう暇をもらつてそこを出てしまった。それから二十年何らの交渉もなく過ぎてしまった。ところがその二人が偶然有楽座でばつたり出会つたのである。男は妻子をつれて席に並んでいた。そこへ、その女が他の若い女に手を引かれて入つて来たのでびっくりしたそうだ。女の方は、自分の隣にいる

昔の人を、見もせず知りもせず突然として邂逅し、突然として別れる。さすが男の方は彼女の盲目が気にかかり、とうとう女の居場所をさがし出して、父に、自分の代りに訪問してくれるように頼んだそうである。父は致し方なく女を訪ねた。そして頼まれた紙包みを渡した。ところが女がどうしてもそれを受け取ろうとしなかつた。楽に今日を過ごすように置いてくれた夫の位碑に対してすまないと言ふのである。

ところが、この女の心意気を示す挿話はさらに続いて、聞いている一郎の異常な関心を引き起こすことになつたのである。父は、女の気込みの底にひそむ悲痛な思ひを語つた。「〇〇が結婚の約束をしながら一週間経つか経たないのに、それを取り消す氣になつたのは、周囲の事情から圧迫を受けて已むを得ず断つたのか、或は別に何か氣に入らない所でも出来て、其氣に入らない所を、結婚の約束後急に見附けたため断つたのか、其有体の本當が聞きたいのだと云ふのが、女の何よりの知りたい所であつた。

女は二十年以上〇〇の胸の底に隠れてゐる此秘密を掘り出し度くつて堪らなかつたのである。彼女には天下の人が悉く持つてゐる二つの眼を失つて、殆ど他から片輪扱ひにされるよりも、一旦契つた人の心を確実に手に握れない方が遥かに苦痛なのであつた。

『御父さんはどういふ返事をして御遣りでしたか』と其時兄が突然聞いた。其顔には普通の興味といふよりも、異常の同情が籠もつてゐるらしかつた。

『己も仕方がないから、夫や大丈夫、僕が受け合ふ。本人に輕薄な所は些ともないと答へた』と父は好い加減な答を却て自慢らしく兄に話した。』

男の本心を知りたいという思いを二十年も心中に秘めている女に、一郎は「異常の同情」を示した——その一郎のうしろで、作者が、女の「気込み」と憐れを見つめている。第一章の三沢の狂女といい、この盲目の女といい、そこに作者が見ている深いものが、一郎の異常な頭の働きを目に見えないところで統一しているものに他ならない。「行人」とはそういう作品なのである。

一郎は父の不誠実を見て、もはや妻に関する二郎の詳細な報告を聞く意義を失った。妻の「離」の言表的な証明が彼にとつては何の役にも立たないことを父を通して間接的に知らされたようなものだからだ。「二十年も解らずに煩悶してゐた事を、（父は）たゞ一口に胡魔化してゐる。己はあの時、其女のために腹の中で泣いた。……実をいふと御父さんの軽薄なのに泣いたのだ。本当に情ないと思つた」——そう述懐する一郎は、女をなだめて「僕が受け合ふ。本人に軽薄な所は些ともない」と胡魔化している父の軽薄な言葉の中に、二郎がのべた「嬢さんの人格に就いて、御疑ひになる所は丸であります」という言葉を聞いてははずだからである。

こうしてついに、破局を感じとつた二郎は家を出て下宿住いに移る。「御父さんのような虚偽な自白を聞いた後、何で貴様の報告なんか宛にするものか。」二郎が別居の挨拶に行つた時、兄はそう言明した。単に二郎を難詰しているという以上に、それは「知」が「知」自身に下した絶望の断案のひびきがこもっている。すでに一郎の絶望は、「今の日本の社会は——」ことによつたら西洋も左右かも知れないけれども、——皆上滑りの御上手もの丈が存在し得るやうに出来上がつているんだから仕方がない」と言う巨視の立場から発している。

最後に兄は、ダンテ「神曲」の中に出てくるパオロとフランチェスカの恋物語を話し出した。フランチェスカの夫の弟であるパオロは義姉と慕しくなり、二人は遂に怒つた夫に殺されるといふ話である。この姦通の話に対して一郎の結論は、人間の作つた夫婦という関係よりも、自然が醸した恋愛の方が神聖だから一時は世間も夫に同情するが、やがて夫は忘れ去られ、あとへ残るのは青天と白日、すなわちパオロとフランチェスカだ、というのである。

二郎には兄の話が皮肉に聞こえたはずだ。しかしその言葉の底ににじみ出ている一郎の心は彼の理解を越えていたと思われる。

一郎の関心は、二郎への皮肉にあるのではなく、夫婦にとつて自然な愛情は不可能ではないかという疑念と不安にある。道徳に加勢するものは一時の勝利者にちがいないが永久の敗北者だ。自然に従うものは一時の背北者だけれども永久の勝利者だ。「所が己は一時の勝利者にさへなれない。永久には無論敗北者だ」と語る。パオロになれないのはもちろん、フランチェスカの夫にさえなれないという断案は、一面一郎の知性が自己の軌道を買いて「離」を断言したことである。が、他面、それは知が行きつくところまで行きついて自裁したことを示している。もはや一郎は妻の「離」を仮定（出発点）にふりもどして知的証明を繰り返すというこれまでのような動きはしないであろう。知の崩壊である。おそらくその後二郎が目撃する一郎夫婦の姿は、その知性の終末と変貌を暗示して余りがある。

ちょうどその折、嬢が娘の手を引いて風呂から上つて来た。いつになく嬢の態度は和やかであった。「自分は永らくの間、嬢が兄に対して是程家庭の夫人らしい愛嬌を見せた例を知らなかつた。自分は又此

愛嬌に対して柔らげられた兄の気分が、彼の眼に強く集まつた例も知らなかつた。兄は人の手前極めて自尊心の強い男であつた。けれども、子供のうちから兄と一所に育つた自分には、彼の脳天を動きつゝある雲の往来がよく解つた。」と二郎は述べている。

果して二郎にどのように「解つた」というのであるうか。嫂の形を得た愛嬌と、それに応じた兄の柔らいだ心の表層の、その底辺でこのとき一郎自身は逆に破滅に向かつて歩みはじめていたのである。言いかえれば、一郎の知の欲求の消滅が、二郎の目には家庭的な夫として、父親としての落ちつきと映じたまでだ。家を出て下宿に移つた二郎は、まもなく、大学における兄の変調を聞くことにならうとは予期しなかつたであらう。

三

『行人』終章の「塵勞」は、兄の病状を気づかつた二郎が、兄の同僚である日さんに依頼して旅に誘い出してもらう話であり、旅先から日さんの報告が中心になっている。前章で私は、一郎の知的自裁という言葉を使ったが、その極限で吐き出された一郎の内面のそれは物語である。作者に即していえば、異常期の神経のいらだちに真正面から挑み、暗漆な迷路をつきぬけようとする限りをつくした果てで、はじめて内密な魂への帰還が自己の固有な自然として体感されたと言つてよからう。知的な苦悶と生の体感という往還両相が不離自然なものとして顕われるところに「夏目漱石」という固有の世界がある。『行人』はその一頂点である。

では往相としての知の窮極にあらわれてきた生の還相とは何か。そ

れが、「所有」という人間存在のあり方として、日さんの手紙が明らかにしてくれるものである。

一郎の不安は居場所の無い不安であると日さんはいう。何も為る気になれないと同時に、何かしなければ居たたまれぬ苦しみ、「僕の心は宿なしの乞食」だと一郎は述懐する。しかもそれが知性の宿命であることを彼は知っている。「人間の不安は科学の発展から来る。進んで止まる事を知らない科学は、かつて我々に止まる事を許して呉れた事がない。徒歩から僕、俥から馬車、馬車から汽車、汽車から自動車それから航空船、それから飛行機と、何処迄行つても休ませて呉れない。何処迄行つて行かれるか分らない。実に恐ろしい。」——これは、二年前漱石が和歌山で講演した『現代日本の開化』の思想であり、年来の文明観である。外発的開花の危機を切り抜ける名案は私には何も無いと講演した漱石、宿なし乞食だとなげいた一郎が、この時、社会事象や社会道德の低落という他に対する批評批判の底で直感している自己自身に対する存在論的、人間の不安を告白するのはまことに示唆深いものがあろう。

「『自分のしている事が、自分の目的になつてゐない程苦しい事はない』と兄さんは云います。

『目的でなくつても方便になれば好いぢやないか』と私が云ひます。

『それは結構である。ある目的があればこそ、方便が定められるのだから』と兄さんが答へます。』

一郎が望む『目的』とは、漱石が心を引かれたベルグソン流に言う

なら、生命的な「歓喜」に通ずるものだと行ってよからう。

ベルグソンは『哲学的直観』の中でこうのべている。「生活の利便にのみ向けられた応用によって、科学は私たちに快適を、せいぜい快樂を約束してくれます。しかし哲学は、すでに歓喜を私たちに与えてくれていると思えます」と。漱石の文明批評の出でくる源にあるもつとも根源的なもの、したがって最も具体的なもの、ベルグソンの生の「歓喜」を約束してくれる躍動への直観に通うものといつてさしつかえあるまい。

一郎は歓喜はおろか、快樂・快適さえ縁遠い孤独に陥っている。そして二年前漱石が語った内発性という言葉で彼が幻視していたものもこの「歓喜」であり、空虚な「快樂」におし流されて行く「方便」でしかない文明のいがい批判が『現代日本の開化』にほかならなかった。

「精神の単純さが文字の複雑さによつて見失われては」ならないとは、同じくベルグソンの言葉だ。漱石の諸作品、文学論、思想、文明批評の多岐にわたる文字言説の核に、「目的」^{エンド}につながらない歓喜の欠除の苦しみ、妻との、人との融溶等質感への夢という精神の単純なるものを見落しては明るくして暗い漱石という人間の本当の姿は見えてこないであろう。

『行人』の一郎が進んで止まない知（科学）の果てで、はじめて経験する自然の「所有」世界の「所有」とはこの「歓喜」の体感、「目的」の所有にはかならない。ここにおいては彼は不動の喜びを味わうのだ。

Hさんの報告によると、一郎は何でも動かないものが懐かしく、海よりも山が気に入るという。動くものは不安なのだ。山路に咲く百合を指さして「あれは僕の所有だ」と言った。足下に見える森や谷を見

て「あれ等も悉く僕の所有だ」という。

しかし、自然と人間が二律背反としてとらえられているわけではないので、人間に敗れて山川草木にかくれるというとき単層な心境ではないことが重要なのだ。彼はこの時、世界の総体の中に、自然と人間を包括する空間の中に定位しているのである。ここまで来たとき一郎は敏感であるより、清澄な心でものを視る。Hさんが心から一郎を心配している時には「純粋な誠」を直視するけれども、Hさん自身が信じてもない宗教の話をもち出してお守り役の装った誠意を示す時には、鋭くその偽りをなじるのである。「死んだ神より生きた人間」「車夫でも、立ちん坊でも、僕が難有いと思う刹那の顔、即ち神ぢやないか。山でも川でも海でも、僕が崇高だと感ずる瞬間の自然、取りも直さず神ぢやないか。其外に何んな神がある」と彼は反駁する。

サルトルは「所有とは特殊の二対象を通じて世界を所有しようとすることである」（「想像力の問題」）という。今、一郎は、所有することによって所有され、所有されることで所有するという、一対象をこえた世界全体との共生・共在を感ずっているのだ。

この、一郎の瞬間の歓喜は、またHさんにもはっきりと感じとれる。だからHさんはこう手紙に書いている。「私は天下にありとあらゆる芸術品、高山大河、もしくは美人、何でも構はないから、兄さんの心を悉皆奪ひ尽くして、少しの研究的態度も崩し得ない程なものを、兄さんに与へたいのです。さうして約一年ばかり、寸時の間断なく、其全勢力の支配を受けさせたいのです。兄さんの所謂物を所有するという言葉は、必竟物に所有されるという意味ではありませんか。だから絶対に物から所有される事、即ち絶対に物を所有する事になるのだら

うと思ひます。神を信じない兄さんは、其処に至つて始めて世の中に落ち附けるのでせう」と。

しかし一郎は自然のみならず、人をも所有する歓喜を望んでいて、心とは言うまでもない。しかも彼は、頭でそれがわかつていても、心が伴わないのに苦しんでいるのだ。「整つた頭、取りも直さず乱れた心」とHさんという。明晰な頭脳が心の空虚を見る。心の虚しさがますます頭を鋭く回転させるといっても同じだ。頭と心の対立がそのまま両者の相即であるところに、伝統を超えた近代知識人としての漱石の真髓があるのであり、同時に、近代を超えた普遍としての伝統の呼び声に促される独特な明治の精神の面目が、そこにあるのである。逆説めくが、心が流行を見つめ、頭が不易を見つめている。伝統への回帰などという通俗性とは一線を画する彼の特性と苦しさがあるのだ。だからこそ漱石は、Hさんを通して、「凡ての原因をあまりに働き過ぎる彼の理智の罪に帰しながら、やっぱり、其理智に対する敬意を失ふ事が出来ないのです」と言わせている。しかも、『行人』の最後、つまりHさんの手紙の結びに、そのことは再びくり返されているのである。Hさんがこの長い手紙を書きはじめてるとき、一郎はぐうぐう寝ていた。書き終ったときもまた寝ていた。「私は偶然兄さんの寝てる時に書き出して、偶然兄さんの寝てる時に書き終る私を妙に考へます。兄さんが此眠りから永久覚めなかつたら嘸幸福だらうといふ気が何処かです。同時にもし此眠りから永久に覚めなかつたら嘸悲しいだらうという気も何処かです。」——この、長篇の最後の結びとしては、いかにも尻切れとんぼのように投げ出されている感じの一節に東洋と西洋、心と頭の両立相即への思いが、やりきれぬにがさ

を籠めて放り出されていると読者は感じないであろうか。そこに、漱石がかみしめている固有の空しさと充実感があつたのである。

四

漱石の神経的な異状の時期は、周知のように三つの頂点が挙げられている。第一期は、大学院学生の頃から松山行にかけての明治二七・八年、第二期は英国留学中から帰国後にかけての三四年秋頃から三七年中頃に至る時期。そして第三回目がこの『行人』執筆期を頂点に、『心』を書き、「伏せられていた漱石の日記」にすさまじく描かれている危期にあたる大正元年晩秋から大正三年にかけての時期である。

それぞれの時期における漱石の苦痛煩悶には共通した特色が感じられる。あながち、それは故意な見方とはいえないものがあり、かえつてそこに「漱石的なもの」を鮮やかに印象づけられる思いがするので、簡潔にまとめておきたい。以上のべた『行人』論を補足立証するはずである。

第一回の異状期に漱石はすでに、「卒業せる余の脳裏には何となく英文学に欺かれたるが如き不安の念あり。」（『文学論』序）と感じた。同じことを『私の個人主義』でも繰り返して、三年勉強して遂に文学が解らずじまいに終つたところに自分の煩悶が根ざしていたと述べた。そしてその煩悶を「空虚」という文字に置きかえて、「私は始終中腰で隙があつたら、自分の本領へ飛び移らう」とのみ思つてゐた」と話し、さてその本領がどこにあるのやら、無いのやら、そのもどかしさに苦しんだと回想している。

二十代の後半に漱石が漠然と感じた空虚、本領不明の不安焦燥は、やがて、三十代後半の危期に、英国体験を通して激しく彼をおびやかすまでに深まることになる。少時より好んで学んだ「左国史漢」に文学を見ていた彼は、英文学の当の本場で心の奥底までゆさぶられる。

「漢学に所謂文学と英語に所謂文学とは到底同定義の下に一括し得べからざる異種類のものたらざる可からず」（『文学論』序）と語った激しい口調からじかに伝わってくる懊悩の中から、彼が自己本位の文学論を計画した事情は、ひとの知るところである。そしてその異常な生活は遂に彼の発狂のうわさをさえ伝えるにいたったわけだ。

一体、それほどまでに彼が英文学に感じた疑惑とは何であったのか。とくにその異状期に、英文学という対象をかりてあらわされた疑惑のはげしさは、知識の世界をはるかに超えた象徴的な事件であったと思われる。

「左国史漢」をかりて（ここでも、あえてかりてと言っておきたい）あらわそうとしたものが、知と理を超えて大いなるものに包摂される共生の世界感覚とでも言うべきものであったことは疑えない。彼は英文学を前にして、いや、近代というものを前にして心の平衡を失い、感性の亀裂を経験し、世界との共在を破られて裸の個に投げ出されたのだ。それが漱石の英国体験の意味なのである。

だが、ここで安易に見過ごしてはならないのは、こういう孤独の体験が可能であるためには、英文学に象徴される「近代」という知的原理が、「伝統」という心的原理に対応するほどに正統な原理として受け容れられていなければならないという点である。西洋・近代・文明というものに未来を正当視する知性の鋭敏さが、大いなる神につき離

されて孤独に沈む心の深さに対応、相即していなければならぬ。この平衡に漱石の「近代」があり、「漱石的」なものの鮮やかな指標が浮かび上っているのである。

心の深まりに支えられて知の深まるという相即の姿は、たとえば『三四郎』の広田先生などにもっとも自然な形ですでにあらわれているものだ。そういうとき、「近代」はむしろ老成の風貌を示す。知と心は互に他をしずめ、現実の中にありながら、現実から退いた位置で自他を眺めるという姿勢をとる。広田先生におのずから出た「漱石的」なものとは、大いなる世界に包摂されぬ「近代」の憂鬱であり、新しい近代に形成されぬ「伝統」の憂愁であるといったら当るであろうか。しかし、第一第二の病状期には、それはまだ知的焦燥としてしかあらわれていない点に『行人』期との違いがあった。知的焦燥の若さと言えるだろうか。

第一期——漱石は「沸騰せる脳漿を冷却して尺寸の勉強心を振興せん為」（明二七・九・四子規宛書簡）に松島に遊び、また湘南の海に旅行をした。「理性と感情の戦争益劇しく」「頸頭の鉄鎖を断ずるの斧なきを如何せん」と苦しみを訴えているが、具体的には、「学問の府たる大学院に在つて勉強すべき時間はありながら勉強出来ぬ」苦しさ、良心の苛責に心が走り、「読みもせぬ書籍を山ほど携帯」して苦しんでいたのである。

同様のいきさつは第二期の留学中にもあらわれている。自己の文学論を企てるべく彼は一切の文学書を行李に収め、かわりにあらゆる方面の書物を蒐集し研究に没頭しようと努めたが、その遅々として進まないことに煩悶し苦しんでいるのである。

おもしろいことに、そういう爆発しそうな苦しさの中で、心の平衡を求めように日常生活のゆとりと情愛を得たいという気持を思わずふともらしているのも一期・二期共通した現象であるようだ。松山に赴いて間もなく彼は斉藤阿具に宛てて、「近頃女房が貰ひ度相成候故田舎ものを一匹生擔る積りに御座候」（明二八・七・二五）とたわむれているし、また英国での焦燥時にも、しきりに妻を思い、妻からの温かい便りを待ちわびて、音信の遠いのを腹を立てている。それらは知的な焦燥からの実生活上のいこいと解放という自然の鎖事に過ぎないかもしれぬ。が、その鎖事が鎖事にとどまらず、人と人との充たされた融合という心の要求に昇華するのにもまた自然というべきであろう。その求めて得られない愛の疑念から、生活上の倫理・徳義に対する要求がきびしさを増して来る。漱石の明治文明批判の現実味は、いよいよ激しさを加える知性とこの徳義感から発している。しかもそれは、そういう現実相の底で、はるかに、知的・徳義的レベルを超えて、世界共在感へのあこがれに昇華してゆく。この形而上性の現成・具体化に第三期の内面の姿が見えてくる。それが『行人』の一郎の背後に見えてくる漱石の姿である。実生活に於ては「伏せられていた漱石の日記」が示すような激しい鬱憤を外発させながら、他方、内部必至の作品として『行人』は書かれていった。内と外との嵐の中で書かれた作品の姿がどのようなものであったかはすでに詳述した通りである。こうして、漱石の道程における、それは一つの頂点をなす深さと激しさを示す作品になったのである。